

plusWan Academy

Dog&Cat Owner/Pet Professional



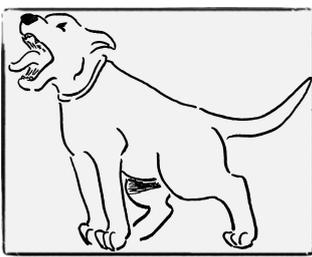
Global.plusWanのこにたんです。
 飼い主といぬやねこたちの生活に「ほんの少しのスパイス」を合い言葉に、飼い主さんやいぬやねこたちに少しのアドバイスやサービスの提供で大きな成果をあげていくことができる、適切な管理と清潔な環境を提供することで健やかな生活を送ることができるという意味を込めている「plusWan」。いぬやねこたちを扱うことについては、常に「動物に係るストレス」を考慮しながら最善の方法を取り入れていく必要があると考えています。そのキーワードは『ポジティブ』。-Tomo.Konishi-



いぬの吠える問題は改善できるか

いぬはなぜ吠えるのか

いぬが「吠える」のは、相手を確認するためや距離を縮めるためなど他者とのコミュニケーションのため、怖いという気持ちや楽しいという自身の精神状態を伝えるため、他者の接近や危険な状態を相手に知らせるためなど自身を守るためなどその要因は様々です。また、飼い主さんがいなくなったり、自身の要求が通らないなどの場合も、相手に対して吠えるようになってしまいます。したがって、通り一辺倒な方法だけで改善できる問題ではなく、その原因とおかれている環境、いぬ自身の性格などをしっかりと把握する必要があります。



①いぬの性格を知ること



いぬには、怖がり、神経質、おおらか、人見知り、興奮性が高い、人好きなど人と同じだけ性格が様々あります。性格がさまざまであればそれによって起こる行動も様々です。比較的におおらかな性格のいぬは吠えにくい傾向にありますが、怖がりや神経質な性格、興奮性の高いいぬは少しの物音や動くものなどの刺激に反応しやすく吠える傾向が強くなります。



②いぬの性格と関連する行動特性を知ること



いぬのあらゆる動作や行動は、そのいぬの性格形成が大きく関わっています。いろいろなことがらに興奮しやすいいぬは、その感情を伝えるために吠える傾向が強くなります。また飼い主の行動を常にチェックしている（ストーキング行動）いぬは飼い主の姿が見えなくなると吠える行動をします。いぬの性格が多少怖がりであったり、他のいぬよりも反応性が高いとストレスを感じやすく、吠える傾向が高くなります。

③いぬのいる環境を見直してみる

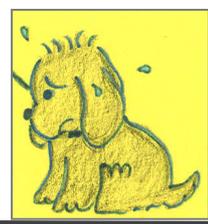
いぬのおかれている環境によって吠えやすい状況になっている場合もあります。室内にいる状況で多いのは、来客時に吠える、外部の物音に反応する、窓の外を行き来する人に吠えるなどいぬは五感に反応する刺激に対して敏感なものです。



④飼い主との関係性も影響がある



飼い主さんとの関係が強くなると依存度を増すいぬもいます。依存度が高くなると飼い主への要求行動が多くなり吠える傾向が強くなります。ひどい場合は分離不安に陥り、吠える以上の問題が出る場合があります。そこまでいなくても、飼い主への依存が高い状況であれば、いぬとの生活における要求行動で吠える確率は高くなります。



Global.plusWan
 Dogs&Cats LifeManner Support
 JAHHA認定家庭犬しつけインストラクター
 主宰：小西伴彦
 website:
<https://pluswandogschool.com>
 連絡：050-3694-5667
hello@pluswandogschool.com
 訓練 第112001号
 (H24/10/29~R9/10/28)
 名称 Global.plusWan
 動物取扱責任者 小西 伴彦

いぬのこと
ねこのこと
オンラインで
学べる講座。

飼い主さんのための勉強会

いぬプロ勉強会

いぬの飼い方
と管理の方法。

こいぬのケアと
管理の重要性と
飼い方の教室

plusWan&polkadog ケア&管理

いぬの吠える行動を叱って止めさせること

Global.plusWanでは、飼い主さんといぬとの生活をより快適で楽しいものとなるように「教育」を通してよりよい関係を向上させるプログラムを実施しています。特に今回のテーマのように「吠える」という問題は簡単に改善するものではありません。

◇いぬを「叱る」こと

「叱る＝行動を止めること」ができなければ叱る意味はありません。もし叱っても行動を止めないのであれば、叱るのは止めて他の方法を模索しましょう。でもどうしても困る行動をしようと叱ってしまいます。そこで、叱るときポイントを示します。

リレーションシッププログラム

■叱ること：行動を止めること

- わかるように伝える
- 「だらだら吠えない」
- 一喝！
- 目的は即座に行動を止める
- ストレスが大きくメンタルに影響
- 学習するプロセスとはならない
- 驚愕反射による行動のフリーズ

▼わかるように伝える

止めさせたい行動を起こしたら早い段階（3秒～5秒）で飼い主は「ダメ!」「イケナイ!」「ノー!」など強い口調でいぬに指示を出しましょう。当然怖そうな顔つきをすることも必要です。

▼だらだら吠えない

「こらこら、だめよ～」 「こんなときには吠えちゃだめ」 など諭すような叱り方では効果はありません。「うちの子は言えわかる」という方もいますが、多くのいぬには適用しないものです。

▼一喝する

「強い口調と短い言葉で」が大切です。いまの状況が良くないことを伝えるにはもっとも効果的な方法です。動物が危険な状況に遭遇した時一瞬で行動を変化させる効果と同じと思えばいいでしょう。

▼即座に行動を止める

叱ることで行動を即座に止めてくれなければ、その方法はうまくいっていないということです。

▼ストレスが大きくメンタルに影響を与える

叱ることは、叱る側と叱られる側があり双方にとってストレスになります。特に叱られる側のストレスは大きく、強すぎるストレスになると精神的な部分で影響があり行動全般に変化が生じる可能性があります。

▼学習するプロセスに当てはまりにくい

叱られた側は瞬間的な態度や行動の変化に対応しにくく、何かと何かを関連付けて行動を変えていくという学習のプロセスに当てはまりにくいいため、再度同じような状況になったときに元の行動を起こすため「何回も叱る」ということが起こります。

▼驚愕反射による行動のフリーズ

叱るという行為は「大きな声で怒られる」ことによって叱られた側は「びっくりした～」というような驚愕反射を引き起こしたため行動が一瞬止まるものです。これは学習ではなく、動物が持っている自然な行動（無条件反射という）なのです。

■叱ることと行動制御

叱るという事自体悪いことではありませんし、動物虐待でもありません。しっかりとこちら側は「叱っているんだ」ということを理解させていくことができれば、いぬは自身の行動を制御することを覚えるようになりますが、今回のテーマである「吠える」ことを根本的に「吠えなくする」ことはできません。いぬが吠えるような事象が起これば毎回吠えるでしょうし、毎回叱って吠えるのを止めさせることは続くと思います。

◇「叱られた＝嫌悪刺激」なのか

叱られる事自体嫌なことです。できれば楽しく行動できることがいいのです。この楽しく行動することは、ややもすると「興奮」を伴った行き過ぎた行動に発展する可能性があります。人は常に「自制」しながら生活していますがこれを「理性」といいます。

■いぬは人社会における「理性」を持ちません

いぬも自身で考えて行動をしますが、人のように周りのことを考えながら行動をしたりはしません。自分勝手に行動をします。まるで5歳程度の子どものように。そうなんです、いぬは5歳程度の衝動的行動をする動物であり、それ以上の行動制御をするようには基本的になりません。

■いぬは叱ることで理性を獲得するか

いぬを叱ることで行動が制御できればよいですが、何度も何度も叱らないといけないようでは叱るという行為が「興奮」という衝動行動を引き起こして、ますます吠える行動がエスカレートしてしまいます。いぬに理性ある行動を促すのであれば、やはり関係性の向上を重視したプログラムを実施するべきです。落ち着いたいぬに育てることができれば、飼い主に注目する度合いも向上して常に飼い主の言葉に耳を傾け指示を聞きやすくなっていきます。

■叱ることの副作用

叱るという行為はタイミングと強さがポイントとなり、実際なかなか効果的に成果をあげられず逆に副作用的な行動を誘発してしまうことになってしまいます。

- 飼い主との関係を損ねてしまう
- 学習性無力感を引き起こしてしまう
- 臆病になったり恐怖や怒りなどの情動行動を起こす
- 特定の人への嫌悪感
- 特定の人以外の行動制御の不能
- 減らしたい行動が増える
- いたずら行動が増える
- 逃げることを覚える

このことから、いぬの情動行動や威嚇や攻撃行動に対して嫌悪刺激の使用は控えなければ取り返しのつかない事態を招いてしまう可能性が高くなります。

リレーションシッププログラム

■叱ること：嫌悪刺激の副作用

- 飼い主との関係を損ねる
- 臆病、恐怖、怒りの情動行動
- 特定の人への嫌悪感
- いたずら行動が増える
- 興奮性が高くなり行動制御不能
- 攻撃性行動を引き起こす
- 逃げることを覚える

リレーションシッププログラム

◇いぬのこころを育てるトレーニングプラン

Global.plusWanの「いぬの生活マナー教室」は、飼い主さんといぬとの関係性向上のための教室です。いぬをじっくり観察しながら無理のないレッスンを提供しています。

■ばびいらんプログラム

生後3ヶ月から5ヶ月までのこいぬのための教室プランです。トレーニングというよりこいぬの月齢で起こる行動の対処の方法や考え方や毎回トイレのしつけのポイント、甘噛み対処法、お散歩練習などを4レッスンで行います。



■ヤングプログラム

生後6ヶ月から10ヶ月までの若いこいぬのための教室プランです。この月齢になるといたずら行動や感情からくる情動行動が顕著に発現する時期ですので、しっかりと飼い主との関係構築が必要となります。飼い主の指示をしっかりと聞くことを覚えていくための4レッスンとなります。

■ルールプログラム

生後11ヶ月以上のこいぬのための教室プランです。飼い主との関係構築に加えて生活の中で起こる様々な問題点の改善を目指していくレッスンとなります。

いぬの吠える行動を褒めながら改善する

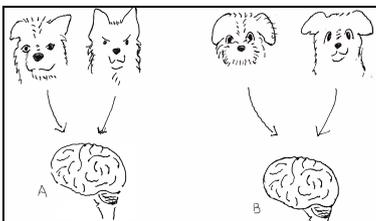
いぬの吠える行動は怖い、嫌だ、嬉しい、楽しいなど感情がからむ情動行動の場合が多いのですが、その感情はどこから沸き起こってくるのでしょうか。

◇脳のはたらきと感情との関係

動物の行動は脳の働きによって決まります。感情を司っているのも脳、いろいろなことを学習できるのも脳です。さて「なんちゃって脳科学」のお話をしましょう。

■脳の機能（個性について）

動物の脳は外部からのいろいろな刺激によって反応して様々な行動と結びつけています。これは親からの遺伝により構成された脳に生後の生活環境のあらゆる刺激にさらされて作り上げられています。いぬにもそれぞれ個性があるのは生まれ出る時に親やそれ以前からの遺伝要素が個によって違うからです。この違いを血統といいます。さらにその後いろいろな家庭環境の中で育っていく過程でも、さらされる刺激が様々であることから脳の構成要素もそれぞれに違うというわけです。

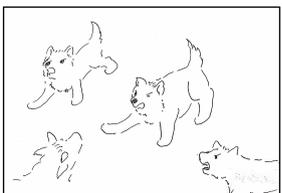


■脳の機能（動物の学習）

動物の脳は動物種によって特徴があり、狩りをする肉食動物とその肉食動物から身を守って生きていく草食動物では生き抜いていく過程が違うことから脳の機能もそれぞれに違います。狩りをして生きていく肉食動物の脳は子どものころから追いかっこや喧嘩ごっこなど将来身につけていくべき行動が頻繁です。その反面草食動物では集団で急斜面や足元の悪い場所での追いかっこや走るという行動が頻繁です。このように子どもの頃に起こす行動は、必ず成長したときに必要な行動につながっていくため、繰り返し繰り返し兄弟など仲間同士で遊びながら学習を進めていきます。

■脳の機能（いぬの習性）

いぬは狩りをする肉食動物に属します。いぬは効率よく獲物を得るために仲間とともに行動し、緻密な戦略を練り獲物を仕留めます。いぬは元来仲間を必要とし、仲間とともに平和に共存する方法や仲間とともに楽しむための方法、そして獲物を追いかけて仕留める方法が生まれ持ってより備わっています。



■脳の機能（いぬの学習）

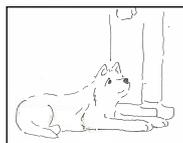
いぬは成長する段階でさまざまな関連付けが起こり、学習が進み行動を起こしていきます。この成長段階では非常に遊びが重要な項目となります。私たちも成長していく段階で仲間意識を構築し、コミュニケーション方法を見つけて、信頼できる、もしくはできないということ判断しながら行動が定着してきます。この段階で言葉を使うことによりスムーズなコミュニケーションを図ることができるのですが、いぬはコミュニケーションを図る時に動作を使います。こいぬの時から人との生活の中にまみれ、人を仲間として捉え、動作をつぶさに観察し「嬉しい、楽しい」というポジティブな感



情と「怖い、嫌だ」というネガティブな感情を人の動作に合わせて発現していきます。

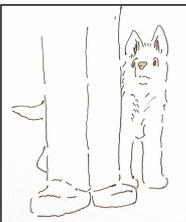
■いぬが安心できる環境を（いぬの習性）

いぬは感情豊かな動物であり、いぬの行動はその感情の現れです。自身の身を守らなければならない不安で緊張のある状態だと、常に周囲に気を配り少しの刺激でも反応してしまいます。大切なことはいぬがリラックスしていただける環境を提供することであり、最も重要なことは飼い主とのコミュニケーションを向上させることにあります。◇いぬと飼い主家族との信頼のある関係性を向上させるをご覧ください。



◇いぬの感情をコントロール

いぬが吠えるということには、必ず理由があります。欲求や要求で吠える場合もあれば、恐怖や警戒で吠える場合もあります。前述と後述では対応の方法が違うものです。感情をコントロールするには飼い主といぬとの絆の向上が欠かせません。飼い主の側は「安全で安心できる場所」であることを教えてあげましょう。



■いぬが欲求や要求で吠える場合

この場合は、対象者は飼い主である場合がほとんどです。ので、いぬに関われない、かまっていられないことを知らせる必要があります。よくある方法が無視という方法であり、放っておくこととなりますが、効果的でない場合もあります。基本的な対処法はいぬに「あきらめる」「我慢する」ことを教えることです。なんかいぬにそんなこと教えるのは可哀想と思うかもしれませんが、いぬのすべての欲求や要求に応えることはできませんし、我慢してもらうことは大事なことです。そのためには日頃からコミュニケーションをはかりいぬに「満足」を感じる生活を送ることです。あと一つ方法があります。それは叱ることです。「いまはかまってる暇はない!」とキッパリと叱ることです。叱っても逆効果で興奮してしまうという方は、いぬとのコミュニケーションが上手にとれていない証拠になりますので、「信頼ある関係性を向上させる」項目をやってみましょう。

■いぬが恐怖や警戒で吠える場合

多くのいぬは刺激に対する反応性は高いものです。状況によっては興奮性も高くなっていることがあり、止めさせるにはかなり骨が折れます。恐怖や警戒はいぬの感情行動と考えます。感情行動は日々生活をしている環境や飼い主の接し方などが影響しているもので、飼い主の元にいれば安心できるという状況を作ってあげることが大切です。

■いぬがなにかを追いかけて吠える場合

これは基本的にいぬの本能行動である「捕食性行動」であり、いぬの習性なのです。この行動は5、6歳程度の子どもの行動に似ていますが、これは好奇心が勝り危険察知をする能力がまだ未成熟な状態なのです。人は成長すると危険察知能力が高まり、好奇心による行動を抑制できるようになります。いぬはどうかというと、いぬが成長しても人のように好奇心を抑制できるようにはなりません。いぬが自身で好奇心を抑制できるようにするには、日頃からコミュニケーションを高めるための教育が必要になります。



plusWanAcademy
ここにたんサポート

生活マナー教室
サポート

plusWanAcademy
ここにたんサポート

ココロたん
いぬの保育園
運営サポート

Global.plusWan
ここにたんサポート

ココロたん
国際ペット学校
サポート

plusWanAcademy
ここにたんサポート